

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷六十第

行發日一月三年二十正大

論叢

サン・シ
モン派の社會改造哲學及び連帶思想

文學博士 米田庄太郎

加特力教の社會論者に就て

法學博士 田島 錦治

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

時論

地租論

法學博士 小川郷太郎

小作調停法案に就て

法學博士 河田 嗣郎

說苑

舊岡山藩の社倉法に就て

經濟學士 黒 正 巖

雜錄

米國研究の必要

法學士 本庄榮治郎

性別年齢別失業統計

經濟學士 岡崎 文規

アダム・スミス生誕二百年

法學士 本庄榮治郎

經濟論叢

第十七卷 第三號 (通卷第九十三號)

大正十二年三月發行

論叢

サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想(一)

米田 庄太郎

緒言

サン、シモン派の説を研究する爲めに、最も重要なる資料となるものは、云ふまでもなく、ロوران(Laurent)の指揮の上に編纂され、千八百六十五年より千八百七十八年までに公にされた「サン、シモン及びアンファンタン集」(Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin)四十七巻である。又單行本にして同派の説を研究する爲めに、從來最も重要視されて居るものは、バザール(Bazard)の「サン、シモン説解説」三巻である。(本書は普通「Exposition de la doctrine Saint-Simon」と稱せられて居るが、正確に云へば、其の題名は Doctrine de Saint-Simon. Exposition

論叢

サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想(一)

第十六卷 (第三號)

一) 四二五

である。第一卷は千八百三十年に、第二卷は千八百三十一年に出版された)。而してサン、シモン派の説を研究したる最初の著作中最も良好なるものは、Carove, *Der Saint-Simonismus und Französische Philosophie.* (1831). 及び Lorenz von Stein, *Geschichte der Socialen Bewegung in Frankreich.* (1850) であること云はれて居る。此のフオン、シタインの著書の最近版、即ち千九百二十一年版に於ては、サン、シモン及サン、シモン派の説の研究は第二卷中にある。其の後特にサン、シモン及びサン、シモン派の説を研究するを目的として公にされた著作にして、有益と認められて居るものは、Booth, *Saint-Simon and Saint-Simonism*, 1871. Janet, *Saint-Simon et le Saint-Simonisme.* 1879. Warschauer, *Seint-Simon und die Saint-Simonismus*, 1892 等であるが、尙ほ Adam, *La Philosophie en France* (1893) を Gide et Rist. *Histoire des doctrines Economiques* (1909) などの如く、佛國の哲學史や又は社會思想の歴史に關する著作中には、サン、シモン派の説を研究して居るものは多い。併し特にサン、シモン派の歴史を詳しく研究したる著作は、千八百九十六年までには現はれて居ないが、此の年には Charléty, *Histoire du Saint-Simonisme* 及び Georges Weils, *L' Ecole Saint-Simonienne. Son Histoire. Son influence jusqu'à nos jours* の二書が公にされ、吾人は此等の著作によりてサン、シモン派の歴史を始めて可成詳しく學ぶことが出來たのである。尙ほシヨレス氏 (Jean Jaurès) 指導の下で著作せられたる

Histoire-Socialiste の第八卷及び第九卷中に、サン、シモン派の運動に關する興味ある記事がある。本論文は右に擧げたる諸書中、京都帝國大學に所藏されて居るものは總て參考して、サン、シモン派の社會改造哲學を研究し、其の中に社會連帶の思想が如何に展開されて居るかを究明せんとするものである。

今サン、シモン派は云ふまでもなく、サン、シモンの思想を祖述する一團體である。併し單にサン、シモンの思想を祖述するだけに止まつたものでなく、之を組織して論理的に大に發展させたもので、或意味では新しき社會思想と見做してもよい程である。全體サン、シモンは本雜誌前々號の拙稿「サン、シモンの社會改造哲學」中に述べし如く、幾多の新觀念を述べたが、併し之を組織的に又論理的に展開することは出来なかつたのである。彼は一冊の組織的大著作も殘さなかつたので、只多數の小冊子を殘して置いたゞけである。されば其等多數の小冊子中に説述されて居る幾多の新觀念を論理的に結合し組織して、一の思想體系を建設し、又之を實際に適用することは、彼の門下生に課せられたる任務であつた。而して彼等は之を企だつることによりて、サン、シモン派と稱せられる一の思想團體を立て、サン、シモン派運動と稱せられる一の社會運動を起し、以て其の後の社會思想及び社會運動の發達に重大なる影響を及ぼしたのである。若しサン、シモン派の運動が起らなかつたらば、恐くはサン、シモンの名は全く忘れられたかも知れないの

である。吾人はサン、シモン派の思想や運動を研究することによりて、サン、シモン自身の思想は其の未熟な或は萌芽的な状態の中に、何物を含蓄して居たかを明らかに學ぶことが出来るのである。

1 「生産者」(Le Producteur)の根本思想

サン、シモンが、彼の晩年の生活を安樂ならしめ、彼に師事せる猶太人銀行家オランダ、ロドリギユースの邸宅で、安らかに此の世を去つたのは、千八百二十五年五月十九日であつたが、此の時彼の葬式に列し、彼の棺をペールラシエーズの墓場まで送つたのは、既に彼の門下を去つたオーギユスタン、チエリ及びオーギユスト、コントの外、ロドリギユースを始め彼の忠實なる門下生十一名程であつた。而して此等の人々が墓場より歸りてロドリギユースの宅に集り、他の門下生をも集めて、サン、シモンの思想を研究し宣傳する爲めに一團體を作り、且つ機關雜誌を發行することを議決したのであるが、是れが即ちサン、シモン派なる團體の始源であつた。夫れより間もなく「生産者」(Le Producteur)が週刊雜誌として發行された。(後には月刊雜誌となり、而して千八百二十六年の暮れに廢刊された。)

今「生産者」の目的を簡単に云ひ表はせば、つまり一新哲學によりて人類の物質的發達と同時に

其の知力的及び倫理的發達を促進すると云ふことにあつたのである。然らば其の新哲學と云ふは如何なるものであるかと云ふに、夫れは主としてオーギュスト、コントの論述したものであると云はれて居るが、其の大要は左の如くである。

A「生産者」の社會哲學

夫れ人類の第一の必要或は要求は、一の一般的(普遍的)教説(教義 une doctrine général)である。人類が之を缺く時は、個人的善意は無方となる、是れ人間は最早眼前に高尚なるものを有しない處で、全く利己心に支配されることになり、而して夫れは人心の腐敗を生ずるからである。併し吾人は現にかゝる教説を有するか。吾人は之を今や全歐洲に於て勢力を争ひつゝある二主義即ちカトリック主義及び自由主義の何れかより求め得るか。カトリック主義は一の普遍的教説を有つて居る。此の教説が中世紀に古代よりも遙かに勝れたる組織或は體制を與へたのである。併し此の教説は今や全く其の價値を失なふた。カトリック主義は最早守舊の一勢力、或は時勢に逆行する一勢力に外ならぬ。僧侶は其の教育的任務を全く忘れて、傳來せるものを保持し、貴族富豪に阿ることより考へない。又民衆は最早僧侶に對して毫も信用を有しない。而して自由主義は一層近代的なる觀念を有つて居る。併し夫れは一般的教説を有しない。其の唯一の熱情は舊制度に對する憎惡である。併し今日では愚人に非ずば舊制度に愛着して居るものはない。自由主義の

唯一の崇拜物は革命である。併し革命も亦既に其の使命を果した。或人々はナポレオン第二世を夢み或人々は共和政を夢みて居る。而して其等の人々は總て實證的或は現實的な仕事に力を注がずして只空想を追ふて居るのである。彼等は只自由と云ふ空虚な言葉を口にするだけで、經濟問題が如何に重要になつて居るかを覺らない。而して經濟問題に關しては彼等は只「放任主義」を唱へて居るだけであるが、此の放任主義なるものは、惰懶者を庇護する爲め、又競争を自由にして貧困を増長する爲めに便宜な一の工夫に過ぎないものである。

右に述べし如く、カトリック主義も亦自由主義も、總て不充分であるから、此處に「生産者」は堅固なる基礎、即ち歴史に基づく一新教説を提出せんとするのである。よく理解すれば歴史は一の確實なる科學にして、其の法則は一度過去に於て認識されると、現在及び將來に對して、鮮明なる光を投ずるものである。夫れは神學的形而上學的及び實證的三状態の連續を示し、國民は孤立から合致へ、戦争から平和へ、反對から團結へ進んだことを教へる。夫れは人間の活動の三大生産物即ち藝術産業及び科學によりて實現されねばならぬ。總て働く人或は勞働者と云へば、産業者か學者か又は藝術家である。此等の部類の何れにも入らない人々は、總て惰懶者である。而して惰懶は消滅す可きである。吾人の實現すべき目的は、右の三部類の大仕事の同時的發達を促進する一の社會組織である。而して夫れが爲めに、吾人は靈權と俗權との間に、中世紀に於てなされ

たる區別を立てねばならぬ。靈權或は精神權は、過去三世紀間カトリック僧侶を支配せる其の守舊的退行的精神に拘らず、人々を結合し、一般的觀念を保持し、又人間を不具ならしめる恐れある分業の有害な結果を防止する爲めに、常に必要なるものである。此の靈權は最早僧侶に屬せず學者に屬すべきである。而して學者の任務は單に科學を完成するだけでなく、科學の教授を監督し、公共教育を指導するにある。俗權は產業者、學者及び藝術家中最も勝れたる人々に信託されるであらう。此等の人々は各人の能力に應じて其人の地位を決定するであらう。蓋し或民主主義者の夢みるが如き絶對的平等を主張するは愚であるからである。不平等即ち功勞の差異に基き、尊敬と保護との相互的情操に基く位階制 (la hierarchie) は、社會生活に必要缺く可からざるものである。

右の組織或は編制は、總ての範域に於て進歩を可能ならしめるであらう。先づ第一には科學の進歩が可能となる。今日は各科學の孤立して居ると同じく、各科學者は孤立して居る。併し中央指導團體が設置され、夫れが既に得られたる結果を明かにして、今後發見す可きものは何であるかを指示し、常に理論の研究を實際的改良の研究と結び附けて、各科學者のなす可き仕事を定める時には、右の状態は全然一變するであらう。而して又產業は驚嘆す可き一機關即ち信用制度の手段によりて更生するであらう。之れによりて懶惰者の金は、銀行家の媒介によりて働く人々

の用に供せられる。信用制度は信任の精神を實業中に輸入することによりて、實業を倫理化するものである。更に産業は新しき精神によりて活力を賦せられ、僱主によりて労働者が絞取或は掠奪されることを廢して、兩者の共同團結を發達させるであらう。藝術は今日では全く無力な状態に萎縮して居る。此の事は今日人々が古典主義と浪漫主義との争ひの如き、無益な争ひに大に興味を感じて居ることによりて、明らかに示されて居る。今日の藝術には大題材が缺け、大靈感が缺けて居る。是れ藝術は傲慢なる孤立に自から立て籠り、現代生活の中に入り込むを否むからである。藝術は只時代の觀念及び情操を表現し、人道的熱情を昂奮させると云ふ條件の下に於てのみ、價値を有するのである。將來の藝術家はよく其の使命を會得するであらう。詩人は科學の勝利、戰爭の終末、普遍的或は世界的共同團結を歌ひ、畫家及び彫刻家は今日の展覽會に於て見ることが如き、恥づ可き作品行列を已めて、優秀なる作品の眞に美はしき公同祝祭を吾人に示すを樂むであらう。

總て此等の進歩は只一の強い、活動的な權力の指導の下に於てのみ、成就され得るものである。自由主義は國家に對する猜疑心を挑發した。經濟學者は政府を潰瘍と稱し、其の職分を出来るだけ小ならしめんとする。併し夫れは謬見であつて、まさしく其の反對が眞實である。國民的諸勢力の總合たる權力は、一切の大觀念、總ての創始を誘發するものでなければならぬ。政治を行

なふものがよく其の任務を解した日には、人々は喜んで俗權に服するであらう。科學的證明に基いて立てられたる一の普遍的教説が、新しき靈權に依て教へられる日には、良心の自由と云ふ潜在なドグマは消滅するであらう。今社會が上に述べし目的に向ふて進みつゝあることを示す多くの徴候がある。信用制度は段々發達して、大に勞働者の利益を増し、利子は段々減少して、大に懶惰者の利益を割で居る。而して又平和を愛する念が大に普及して居る。吾人は此等の好徴候を利用し、而して將來の社會組織の勝利を促がさねばならぬ。併し夫れは突忽的革命に依てなく、進歩的變動に依てさなければならぬ。

「生産者」の社會哲學の大要は、以上述べしが如きものであるが、今之を後のサン、シモン派の思想發達に照らして注意すべきは、夫れは純實證主義的にして、毫も宗教的色彩を帯びて居ないことである。かくてサン、シモン派の思想が右に述べしが如き、全く實證主義的なものから、如何にして後に見るが如き、大に宗教的なものとなつたかと云ふことは、同派の思想の發達の研究上、甚だ重大なる問題となるのである。併し此の問題を研究するに先だち、余は更に「生産者」の社會經濟的思想を考察して、見たいと思ふ。是れ「生産者」が當時世人の注意を惹いたのは、右の社會哲學的思想の方面に於てはなくして、「産業的體系」の主張、其の社會經濟的思想の方面に於てはあつたからである。

B、「生産者」の社會經濟思想

「生産者」の社會經濟思想の重要なものは、主として後のサン、シモン派の法王^{パプ}アンファンタ^ン(Enfantin)によりて考へ出されたものと認められて居るが、今アンファンタも此の頃にはまだ全く宗教的傾向を帯びて居なかつたので、純然たる社會經濟學士から社會經濟問題を論じて居たのである。而して彼の大に敵視したのはアダム、スミス派の學説であつた。

アンファンタンの考へし處によると、アダム、スミス派は人間よりも生産物を重要視して居る。而して同派の一人たるマルサスの如きは、實に其の傾向を殘忍と云ふ可き程度にまで發展させて居る。今や舊經濟學は社會的組織の學(La Science de l'organisation sociale)に地位を譲らねばならぬ。歴史は共同團結(L'association)は將來の法則であることを吾人に示して居る。信用制度は産業的共同團結を可能ならしめ、利率を減ずることによりて、懶惰者の重要を破壊する。産業は舊組合制度にも、亦現在の無政府狀態にも適合し得ないので、夫れは只銀行家を指導者とする一新制度にのみ適合し得るのである。信用制度によりて紙幣は漸次に金貨に代はるであらう。恰も公債が租税に代はらねばならぬと同じである。而して國家は右の仕事を開始す可きである。人々は常に「時勢」を待つとか、「輿論」に従ふとか云ひ、「時勢」や「輿論」が恰も創造力であるが如く考へて居るが、併し働かねばならぬものは、時勢や輿論ではなくして人間である。

アンファンタンは更に財産に就ても少しく論じて居るが、彼の考へる處によれば、遺産制度は懶惰者の子をして、屢々父の死を望ましめることによりて、不道徳な思想を發達させるものである。而して若し將來の社會組織が一種の財産共有制を自から生み出すとするも、總ての人々は之に従ふ可きである。此處にアンファンタンが自説を確證する爲めに、彼の敵視するリカールドの説を利用して居ることは注意す可き點で、彼はマールクスに先だち、舊派經濟學説を論理的に徹底させて行くを、遂に其の謬見を暴露させるに至ると云ふ論法を使用したのである。彼は生産物の價値は只之を生産するに必要な勞働の分量にのみよりて定まると云ふ説に基いて、土地所有者の利得は、生産費中に入らないから、獨占の結果であらねばならぬと論決し、而して夫れはつまり働く人々は一定の人々が遊んで暮す爲めに、彼等に支拂ふことになると論じて居る。而してアンファンタンは遺産制度を廢止する爲めに暴力を用いることは、恐くは不合法であるまいと考へたが、しかも夫れは無用で又危険であると述べて居る。是れ彼の見る處では信用制度の發達は平和的に同一の結果を齎らすものであるからである。

併し當時はまだ社會主義的思想には、世人はあまり興味を有たなかつたから、上述の如きアンファンタンの説は別段注意を惹かなかつた。而して「生産者」に現はれた社會經濟論で最も多く讀者の注意を惹いたのは、自由主義の攻撃と産業の讚美とであつた。自由主義の攻撃が大に世人

の注意を引いたのは、是れ當時に於ては尙ほ自由主義と保守主義との争ひが盛んに行なはれ、兩者以外の主義は殆んど認められて居なかつたのであるが、然るに此の際、一方に於ては保守主義を攻撃すると同時に、他方に於ては激しく自由主義を攻撃し、良心の自由を排斥すると云ふことは、世人に奇異な感じを與へたからである。而して又産業の讚美が大に世人の注意を惹いたのは、是れ佛國に於ても當時近代的産業が勃興して來たが、まだ思想家が之れに十分な注意を拂ふて居なかつたが爲めと、産業を大に重要視して、佛國を英國の如き産業國として發達させんとする欲求が、段々世人の心に強まりつゝあつたが爲めと思はれる。併し「生産者」はあまり讀者を得なかつたので始め週刊であつたのを、後月刊に更へたが、それでも尙ほ發行が困難になり、遂に翌年(千八百二十六年)の暮に廢刊するに至つた。而して夫れと共にサン、シモン派の最初の團結が壞れたのである。

(二) サン、シモン派の復活と宗教的傾向の發達

却説「生産者」の廢刊と共に、サン、シモン派の最初の團體は崩壞したが、併し間もなくオランダ、ロドリギユースを中心として新しき團體が作られた。而して此の新團體に於て、先づサン、シモン説の宗教的方面が大に發達して來たのであるが、夫れは當時の佛國思想界の傾向に依て大

に助長されたのである。浪漫主義が佛國思想界を風靡し始めたのは千八百二十七年頃にして、此の頃からして小説家は信仰を失なへる人々の苦惱を競ふて描き出した。而して青年が熱情を燃やしたのは、アドルフやルネーやウエルナルなどに對してであつた。併し夫れと同時に巴里の青年の大部分はフォア將軍を崇拜し、ゼジュイト派を惡んで居た。かくて彼等の多數に於て、反僧侶主義と宗教或は宗教心との一の奇妙な混合が生じた。夫れよりして又基督教に取り代らんとする總ての新しき宗派に對する、熱烈なる好奇心が燃へ上つたので、而してかゝる圍境の中に、サン、シモン教會が生れたのである。

今右の圍境の中に於て、サン、シモン派の宗教的傾向の發達するに當て、思想上之れに重大なる影響を及ぼしたるは、傳統派の哲學者ジョセフ、ヅ、メートルとヅ、スタエル夫人とにして、而して其の宗教的轉化に最も力を盡くしたるはオランダ、ロドリギユースの弟アーゼヌ、ロドギユースであつた。但しサン、シモン派の人々は、先づヅ、メートルからして歴史、一の強固なる權力の必要、個人主義の危險、社會的連帶の善福等を學び、而して彼の左の言葉を、豫言的のものとして遵奉したのである。即ち「一切の眞實なる哲學は、二つの假説の何れかを選ばねばならぬと思はれる。夫れは一の新宗教を形成せんとするか、又は基督教が或非常な仕方によりて復活されるかである、」而してサン、シモン派の人々は、其の中の第一の假説を選び、新しき宗教を形成せ

んとする方針をとつたのである。又サン、シモン派はツ、スタエル夫人よりして、獨逸の浪漫主義及び汎神教を學び、殊にレッシングの永久福音の思想を學んだのである。而して彼等は新宗教を建設することは、サン、シモンが「新基督教」に於て着手し、しかも完成せずして世を去れる其事業を完成する事にして、眞に彼の志を大成するものであると確信した。

アーゼヌ、ロドリギユスは、身體は虚弱であつたが、併し燃たる魂を有し、將來に對して熾烈な信仰を抱ける青年であつた。彼は信仰の爲めに結婚をも犠牲に供して、絶對的に童貞を固守し、自から將來の教會の基礎を据へ附けたと云ふ無限な大喜悅を感じつゝ、二十三歳の時死去した。彼は早くより宗教書を耽讀し、猶太人として猶太教は云ふまでもなく、基督教及び回々教をもよく研究した。而してサン、シモンの進歩説に於て、基督教と猶太教とを調和せんと企だてたのである。彼はレッシングの「人類の教育」を譯し、之れに自分の序文を附して公にせる外、別に何等の著書をも殘さなかつたが、併し或人々に送れる二通の書簡が傳はつて居る。而して其等の書簡は實にサン、シモン派の最初の宗教的教義書であると云はれて居る。(Engèle Rodrigues, *Lettres sur la religion et la Politique*. 1829.) 夫れによりて見ると、ロドリギユスは宗教は哲學及び科學よりも勝れたるものと信じて居る。彼の考へる處では、哲學は嘗て生命現象を説明することが出来なかつた。精々の處で、其の消極的な一定義を與へたゞけである。而して科學は只夫れ

が人間に教ゆる實際的利益によりてのみ、意義あるだけである。併し現在の總ての宗教は積廢して居る。是れ其等の何れも眞に人類の宗教と稱し得られないからである。靈と肉、神の國とカイザルの國とを分離せる基督教其物は、惱めるもの、貧しきものゝ宗教にして、萬人の宗教ではない。新しき宗教は靈と共に肉をも聖化するであらう。是れ總てが神に在り、神によりて存じ、神であるからである。かくでロドリギウスはサン、シモン派を汎神教に導いたのである。

夫れと同時に若き使徒ロドリギウスは又、サンシモン團體の中に位階制を輸入した。彼の創意によりて、始めてサン、シモン徒の中に位階別が立てられたのであるが、先づ最高位には首領等より成る樞機員會(Le College)が設定され而して夫れより第二階、第三階、第四階と云ふが如くに、諸位階が立てられた。更に樞機員會の人々は總て教父(Pater)と稱せられ、他の位階の人々は教子(Filii)と稱せられ、而して總て同位階の人々は兄弟であると規定された。

然るに主としてアーゼヌ、ロドリギウスの努力によりて、サン、シモン派に於て、右に述べしが如き宗教的精神が大に強まるに至つて、サン、シモンの直弟子の人々は大に不滿の念を起し、續々同派を脱した。而して千八百三十年一月にアーゼヌ、ロドリギウスが死去せし後は、同派の樞機員會として主として勢力を振へるものは、オランダ、ロドリギウスとアンファンタンとパザールとの三人となつたのである。併し此等の三人は大に活動した。而してサン、シモン派なるもの

が一大勢力となつたのは、實に此等の三人の力によるので、殊に後に同派の法王(*le Pape*)となつたアンファンタンの力によるのである。但しアンファンタンの勢力が大に増大し、彼が後に述ぶるが如き婦人論を唱ふるに至つて、バザールも亦ロドリギユスも同派を脱退し、而してアンファンタン一人が同派を率ひて大に活動したのである。

却説アーゼヌ、ロドリギユスを中心として、サン、シモン團體が大に宗教的となるや、さきに述べしが如き當代の思想界の形勢は、多くの青年をして同團體に入らしめた。而して同團體の人々は、始めは其の中で廣い住宅を有するものゝ處で、順番に會合して居たが、會員の増すに隨ふて遂にモーシニー町に會館を設くるに至つた。而して千八百二十八年の終りには、公開講演を開催することになつたが、此時講師に選ばれたのはバザールにして、同講演は同年から千八百三十年の始めまで續けられ、同年及び翌年に「サン、シモン説解説」(*Exposition de la doctrine Saint-Simonienne*)二卷として出版された。本書はサン、シモン派の社會哲學び社會政策論を組織的に論述せる、最も重要な著作として認められて居るもので、是れまでに公にされて居る社會思想史や經濟學史や哲學史に關する著作中、サン、シモン派の説を論ずるものは、一般に本書によりて之を論じて居るのである。それで本論文に於ても、本書の根本思想は少しく詳しく述べて置きたいと思ふ。(未完)